

ラガシュ王国の軍事・労働組織 に関する文書の背景の研究 (I)

山 本 茂

はじめに

シュメールの Early Dynastic Period「初期王朝期」についての社会的・経済的・政治的歴史研究が、1940年代はじめから50年代末に至る間に、Sumer社会発展の全体像を巨視的に獲得しようとする意欲のもとに、特にアメリカとソ連邦において相当の成果を挙げた¹⁾ことは、斯学の新展開としてまことに重要な現象であった。しかし1959年、P. A. Deimel—Anna Schneiderの神殿都市国家像は余りに神殿領中心に過ぎて余りに小さく、その背後に蟠居する複雑でより大きな全体をよく見透しえなかったとするИ. М. Дьяконовの著書が公にされる²⁾に及んで、研究史は再び新段階を迎えることになった。

というのは、Lagash文書によるDeimelのシュメール都市国家像³⁾は、その発表以後、かれ自身によって出版せられたFara文書やUruk・Urの古拙文書の出版⁴⁾を前提とする、Th. Jacobsenの政治史的展望の新展開の時期(1943～57)において、既に全シュメールの国家像としては批判されていたけれども、しかしLagashに関する国家像としてはなお通用する面も持っていた。ところがДьяконовによる成果の中には、Lagash文書によるDeimelのLagash像それ自体に対する鋭い批判が含まれていたからである⁵⁾。

それに応えるかのように、1959年以来中原与茂九郎教授は、Early Dynastic Period以前からアッカド時代にかけての社会・経済史料の透視的研究を重ねて来られた⁶⁾が、ついに本誌前号に掲載された最新の論文⁷⁾において、独創的な史料操作に基いてシュメール社会の氏族組織的契機とそれの王権との結びつきを明らかにせられるに至った。それらの一連の論文はその胎生期において、JacobsenやДьяконовの刺戟を受けたものであるが、到達された結果の独自性と研究水準の高さは国際的に高く評価されるべきであり、我が国シュメール学が遂に到達した記念碑的業績というべきであろう。

ここで筆者が取上げようとするのは、ラガシュ王国の軍事・労働組織の問題であるが、この問題についても新展開した研究分野の成果と重要な関連がある。というのは Lagash 文書が神殿経済 Tempelwirtschaft 論、神殿都市 Tempelstadt 論の形成の資料となった文書群であるために、ラガシュ王国に関する研究は、Jacobsen—Дьяконов—中原と発展しつつある新しい全体像といわゆる Tempelwirtschaft 組織との関連の問題、あえて言えば Tempelwirtschaft の実体ないし存否という根本問題に、深くつながることを要請されるからである。その点ではこの文書群が、直接の主題である é-mí, lú-^aBa-ú を越えた、より広い全ラガシュ王国との関連の中で、それを把える可能性をもつという独自の性格が問題となるであろう⁸⁾。

しかし他方、Lagash 文書は、Deimel によって多数 transliterate され、一応主題別に類別されはしたものの、一層の文献学的整理が必要であり、また戦後急速に高まった新しい語学的水準に基く正確な翻字・翻訳が行われた文書はなお極めて少数という現状であって、今なおその語学的研究や文献学的整理もまた研究の前進に不可欠であるという状態である⁹⁾。そのうえこの文書群は3代約22年の治世に亘って驚くべき密集度を示しており、そのような整理、とくに種々の個有名詞の identification が可能であり、また必要な文書なのである¹⁰⁾。

本稿は、En-èn-tar-zi, Lugal-an-da, Uru-ka-gi-na 時代のラガシュ王国の軍事・労働組織をめぐる、上述の研究の新段階による要請に応えながら、同種類の文書の整理・検討を経とし異種類テキスト間の identification による連繫を緯として辿るという、ラガシュ文書に適合した方法を追求した試みである。

第1章 é-mí をめぐる試論

1

先ず1つのタブレットを引用する。

Fö¹¹⁾ 168

I 3200-10/24 še-gur-sag-gál¹²⁾
še-ba še-gar gemé-dumu (igi)-nu-du,
šà-dub-didli II Nin-gír-su-ka

3199 グル・サッガル 84 sil の大麦、
ニンギルス神の婢、子供、イギ・ヌ・
ドゥおよび個々のタブレットの人々へ
の大麦分け、および(かれらの)仕事
に必要な大麦支出、

Lugal-an-da ensí Lagaš^{ki}-ke₄
é-mí-ta e-ne-ba. VI.

ラガシュのエンシ、ルガルアンダが
妃の家から（それを）彼らに分け与え
た。治世 VI 年。

2-ba-am₆.

第 2 回目の分配である。

これは Lugalanda の治世 VI 年の記録であって、gemé-dumu [igi]-nu-du₈ šà-dub-didli^d Nin-gír-su-ka のための大麦を é-mi 「妃の家」（字義通りには「女の家」）から支出させたことを記録したものである。この gemé-dumu igi-nu-du₈ šà-dub-didli^d Nin-gír-su-ka という表現は、それだけで実に多くのことを語っている。

第一に、Urukagina の改革直前の Lugalanda の治世 VI 年に、gemé-dumu igi-nu-du₈ šà-dub-didli Lugal-an-da ensí Lagaš^{ki}-ka という表現でなく、gemé dumu . . .^d Nin-gír-su-ka という表現が使用されていることが注目される。一方 Urukagina の時代に王妃 Šag₅-Šag₅ が管理したのと同じ世帯においては、Lugalanda 時代に、第 2 種・第 3 種の še-ba 表の末書 Unterschrift の総括が、それぞれ še-ba gemé-dumu Bár-nam-tar-ra dam Lugal-an-da ensí Lagaš^{ki}-ka¹³⁾, še-ba igi-nu-du₈ šà-dub-didli Bár-nam-tar-ra dam . . . Lagaš^{ki}-ka¹⁴⁾ となっており、ここでは神の名は書かれていない。しかしまた、これらの人々は lú-ú-rum Bár-nam-tar-ra 「バルナムタルラ所有の人々」とも書かれていない。このような Unterschrift の形式は、これらの še-ba 表に記載された夫々百数十人の人々が、Barnamtarra によって支配・管理されている世帯から大麦の支払いを受けたことを端的に物語っている。

ensí Lagaš^{ki}-ka になるコースの 1 つが、sangu^d Nin-gír-su を経過する道であったことは、En-èn-tar-zi の例によってよく知られる。たとえば RTC¹⁵⁾ 16, VI~VII によれば、u₄-ba En-te-me-na ensí Lagaš^{ki}-kam, VII En-èn-tar-zi sangu^d Nin-gír-su-ka-kam, 19: 「En-te-me-na がラガシュのエンシであり、En-èn-tar-zi がニンギルス神の Sangu であったそのとき、治世第 19 年」。すなわち、エンテメナの治世 19 年のとき、おそらく次のエンシとなった En-èn-tar-zi が Ningirsu 神（^dNin-gír-su: 字義通りには Gír-su^(ki) の主）の sangu であった。神々をないがしろにしたとして Urukagina によって糾弾された、ウルカギナ直前の支配者たちも、実際は Ningirsu 神を名目上の支配者とする管理組織そのものは抹殺しなかったことが、この RTC 16 が示す過程や Fö 168 の問題の表現によって知られるのである¹⁶⁾。

第二に、約 3200 gur-sag-gál という še-ba の量が問題である。この Fö 168 は Lugalanda 治世 VI 年における ^dNin-gír-su を名目上の支配者とする世帯の 2 回目の

2種類の大規模な še-ba と še-gar の総計である。Lugalanda 治世 V 年の Barnamtarra 所管のタブレット, VAT 4421 [Or. 34~35, p. 35] では, 同じ月の še-ba でありながら, (še-ba) lú-kur₆-dab₅-ba 1-ba-am₆, (še-ba) gemé-dumu 9-ba-am₆ となっており, Fö 168 のごとく, gemé-dumu や igi-nu-du₈ への še-ba が第 2 回目であるとするれば, この月には lú-kur₆-dab₅-ba への še-ba は支給されなかったと考えられるからである。従ってそれは Barnamtarra の管理世帯における, še-ba gemé-dumu (servantes et leurs enfants) と še-ba · igi-nu-du₈ · šà-dub-didli 「igi-nu-du₈ 労働者および個々のタブレットの中の大麥分け」と še-gar (後出) を併せたものに当るであろう。

そこで妃の管理世帯の še-ba に目を移すと, Lugalanda 治世六年の 2 枚の第 2 種の še-ba (VAT 4416, L. VI~1; 4628, L. VI~9; Or. 34/35, pp. 43~51)¹⁷⁾ は, ほとんど同じ内容であって, 総人数 154 人, 大麥の総計 44 ¼ gur-sag-gál も不変である。

同じ年の še-ba gemé-dumu は TSA 10 (L. VI~12) だけしか見出し得ない。その人数および大麥の量は Col. XIV~Col. XV の総括によれば, 以下のとおりである。

XIV (Rev. VI) [šū-nigin] (=合計)

(1)	lú ^(1人)	60 sil	}	20 gemé	24 sil
1	lú	48 sil	}	85+2 ⁽¹⁸⁾ gemé	18 sil
2	lú	24 sil	}	28 mí	12 sil
1	lú	18 sil	}		
19	lú	12 sil	}	nita-me	

XV [gú-an-šè 157+2 lú] še-ba [tur]-mah-ba,

še-bi 10+[10]-22½+¼⁽¹⁸⁾ še-gur-sag-gál še-ba gemé-dumu;

Bār-nam-tar-ra dam Lugal-an-da ensí Lagaš^{ki}-ka;

id₈-ezen^d-Ba-ú-ka En-ig-gal nu-bànda É-ki-lam-ka-ta e-ne-ba. VI. 12-ba-am₆.

総人数 159 人, 大麥の量は 19 gur-sag-gál 48 sil である。第 2 種の še-ba が 1-ba と 6-ba でほとんど不変であることを考慮すれば, še-ba gemé-dumu についても, この年度においては大した変動はなかったであろう。従って同じ年の ensí 妃所管の第 2 回目のこの両種類の še-ba の合計は, 上に得られた数値を合計したものにほぼ等しいと考えられる。

人数: 154+159=313 人

še-ba 量: 44 ¼+19 ½¼=63 1¼¼ gur-sag-gál

さらに Fö 168 には še-gar という表現が付加されている。これは諸種の仕事に必要

な大麦のことであって、各種の家畜の飼料、各種のビールの原料がその主たるものである²⁰⁾。エンシ妃の管理世帯ではおそくとも Lugalanda の治世の1年目の10回目からは、聖所や(宮廷の?)料理場などへの「月例の捧げもの」*sá-dug₄-itud-da* も加えられて、*še-gar zíz-gar sá-dug₄-itud-da* と呼ばれる、形式の定まった文書群が出現しており、Deimel 以来 GAR-Texte と呼ばれている。残念ながら Lugalanda の治世 VI 年の gar-Text はないが、治世 V 年の8回目のそれ (RTC 51) における *še-gar* と *še-sá-dug₄-itud-da* の合計は約 95 *gur-sag-gál*, VII 年の1回目 (STH. 1. 30) のでは約 99 *gur-sag-gál* となっている。間をとって 97 とすると、*še-ba še-gar* の合計は $63\frac{1}{2} + 97 = 160.5$ *gur-sag-gál* となる。

人数は Fö 168 には、残念ながら出て来ない。しかし、このタブレットの約 3200 *gur-sag-gál* は、Barnamtarra の所管するタブレットの同年・同種のもの総計約 160.5 *gur-sag-gál* の実に 20 倍に相当する。従って、人数もまた 20 倍とすれば、

$$313 \times 20 = 6260$$

実に 6200 余人分の *še-ba* が含まれていることとなるのである。3200 *gur-sag-gál* という数が問題であると述べた所以である。

第3に、この大量の *še-ba gemé-dumu igi-nu-du₃ šà-dub-didli^a Nin-gír-su* を *ensí* 自らが *é-mí* から「分けた」ことを当然問題にするべきであろう。*é-mí* はここでは *ensí* 妃の宮殿とそれに所属する倉庫、さらには広く *ensí* 妃の所管する世帯全体を指していると考えられ、かつていわれたような「ハレム」でないことは、「ハレム」が大量の主食を貯える機関ではあり得ないことから、明らかである。ここで念のため *é-gal* と *é-mí* に関する史料を検討して *é-gal* や *é-mí* の宮殿としての性格を明かにし、*ensí* や *ensí* 妃との関係をも究明しておく必要がある。

é-gal (字義通りには「大きい家」) は、必ずしも常に王宮の意味で用いられるとは限るまい。その固定度は *lugal* (*gal* [大きい] と *lú* [人]) との合成文字、字義通りには「大きい人」=「国王」ほど完全でなかったかもしれない。事実、*é-gal Ti-ra-áš* という表現も使われていて、それが一種の普通名詞でありえたことを示している。しかしラガシュ王国の行政・経済文書において単に *é-gal* という時、それは、ほとんど凡ての場合、支配者の居城をさすと考えてよい。

先ず *é-gal* がどこにあったかを示す証拠を取上げてみよう。筆者の解釈による内容整理をほどこした transliteration を掲げると:

RTC 40

I { 23 udu-síg udu-dub-kam
1 udu-síg maš-da-ri-a-ni ba-gar } Nigin-mud

II ensí-ke₄ Gír-su^{ki}-a é-gal-la e-ur₄.

{ 25 udu-síg udu-dub-kam
1 udu-síg III maš-da-ri-a-ni ba-gar } Ur-šeš (?)-dù-a

ensí-ke₄ Lagaš^{ki}-ka é-PA-ka IV e-ur₄.

V šu-nigin 50 udu-síg, udu-ú-rum Bār-nam-tar-ra dam Lugal-an-da VI ensí
Lagaš^{ki}-ka. IV.

23頭の「毛の羊」, それはタブレットの (=既にタブレットに記録された定数) の羊である; 1頭の「毛の羊」, (それは) かれ (すなわちニギン・ムド) の捧げもの, (かれの) 所管に編入, (以上は) ニギン・ムド (の所管); エンシがギルスにおいて, '王宮' で剪毛した。

25頭の「毛の羊」, (それは) (定数) タブレットの羊である; 1頭の「毛の羊」, それはかれ (ウル・シェシュ・ドゥア) の捧げもの, (かれの) 所管に編入; (以上は) ウル・シェシュ・ドゥア (の所管); エンシがラガシュで, é-PA で剪毛した。

合計 50 頭の「毛の羊」, (それは) ラガシュのエンシ, ルガルアンダの妃バルナムタルラの所有の羊 (である)。治世 IV 年。

ba-gar の解釈に多少の疑問があるが, 他の大部分の箇所は, 甚だ明晰な管理記録である²¹⁾。この RTC 40, Col. II に, ensí-ke₄ Gír-su^{ki}-a é-gal-la e-ur₄ 「エンシがギルスで, 王宮で, 剪毛した」とあって, é-gal が Gír-su^{ki} にあることは明らかである。なおこのタブレットにおいても, ensí が Gír-su^{ki} においてばかりでなく, Lagaš^{ki} でも剪毛権を持っていたことが明かであり, 濫用の状態においてではあるが, nam-ensí が Gír-su^{ki} 以外の市区 Lagaš^{ki} に及んでいたことが注目される。

この é-gal は単に Gír-su^{ki} だけの行政の中心ではなかった。たとえば, Nik 3 や DP 135 などの lú-ú-rum^d Ba-ú 「パウ神所有の人」に対する軍隊編成記録において, 両テキストとも査閲者は Uru-ka-gi-na であり, DP²²⁾ 135 では, 明かにその査閲が é-gal で行われた; gú-an-šè 155 lú bír-suḫ₅-ḫa-am₆, 12 lú ama-bír-kam, lú-ú-rum^d Ba-ú. Uru-ka-gi-na lugal Lagaš^{ki}-ke₄ é-gal-la zag bí-uš. [Amar (?)]-ki gal-ukù (?)-bi. VI. (DP 135, XIV)²³⁾。

これらの例によって推察されるように、é-gal は全ラガシュ王国の行政・軍事の中心であったに違いない。そしてそのことは、Urukagina 王の改革の前後を通じて不変であったに違いない。

たとえば Urukagina はその治世 IV 年に次のような記録を残している。

DP 339

.....

VI šu-nigin 12 igi-nu-du₈ dumu uru-Az^{ki}-ka-me,
 Uru-ka-gi-na lugal Lagaš^{ki-ke₄} **VII** é-gal-ta e-ta-è-ne,
 Šag₅-šag₅-ra mu-na-sum-mu ;
 nu-sar-ke₄-ne e-ne-ḥa-la. IV.

……合計 12 人の Az 市出身の igi-nu-du₈ たち、ラガシュ王 Urukagina が é-gal から出して、(王妃の) Šag₅-šag₅ に与え給うた。nu-sar たちが(彼らの間に)分けた。治世 IV 年。

この context においても é-gal は Urukagina の王宮以外には考えられない。これと非常によく似た形式の文書が、Lugalanda 時代の家畜配分記録に見られる。文書の前半は破損が激しく、詳細な経緯は分らぬが、末書きの部分は、はっきり次のように読める。

Nik²⁴⁾ 213

III amar-ú-rum Gemé^d-Nanše dumu-kam,
 ensí-ke₄ é-gal-ta e-ne-ḥa-la. VI.

(Lugalanda の王女) Gemé^d-Nanše 所有の仔牛である。エンシ (=Lugalanda) が é-gal から彼ら (=牛の世話をする人々) に配分した。治世 VI 年。

以上の論究によって、é-gal が Gír-su^{ki} にある王宮であったことは明かになったと思う。では é-mí はどうであったか。既にその性格は暗示されたと思うが、なお幾つかのタブレットを挙げてみよう。先ず 2 枚のタブレットの引用が必要である。

Fö 101

I šu-nigin 75 še gur-sag-gal še-ba lú- 合計 75 gur-sag-gal の大麦, kur₆ を
 kur₆-dab₅-ba-ne 取った人々(へ)の大麦分け;

62- $\frac{1}{2}$ ₄ še-ba gemé-dumu igi-nu-du ₈	61 gur-sag-gál 138 sil, 婢と(その)
ša-dub-didli	子供たち, igi-nu-du ₈ , および個々の
	タブレットの人々(へ)の大麦分け;
40 $\frac{2}{24}$ · 7 sil še II 40- $\frac{1}{2}$ zíz. [sá]-	40 gur-sag-gál 19 sil の大麦, 39.5 の
dug ₄ -am ₆	エンマ麦, (月例の) 捧げ物である;
56 $\frac{1}{2}$ + $\frac{3}{24}$ še, še-gar-gud-udu-kam	56 gur-sag-gál 90 sil の大麦, 牛・
	羊の飼料である;
10 zíz bar-bi-gál-am ₆	10 gur-sag-gál のエンマ麦, 余りで
	ある;
é-mí-kam	(以上は)「妃の家」(の分)である。
.....
III ... (DUMU)-DUMU-ne-kam	「子供達」の(分)である。
.....

DP 154 (Urk. II)

I šu-nigin 120-(2+ $\frac{?}{24}$) še-gur-sag-gál	: še-ba
	-lú-kur ₆ -dab ₅ -ba-dè
60	: še-ba
	(igi-nu-du ₈) ša-dub-didli
40-1 $\frac{3}{24}$: še-ba gemé-dumu
120 $\frac{3}{4}$ - $\frac{1}{2}$ ₄	: še-gar sá-dug ₄ -gud-udu
30 $\frac{1}{4}$ zíz-..., 4 $\frac{1}{2}$ zíz-...	: sá-dug ₄
še-ba še-gar zíz-gar lú- ^d Ba-ú-ke ₄ -ne-kam	
10-($\frac{1}{2}$ + $\frac{3}{24}$) še-ba DUMU · DUMU-ne-kam	
.....	

両者を対照させると, é-mí-kam と lú-^dBa-ú-ke₄-ne-kam との対応は明白であると同時に, é-mí が「妃の(支配する)世帯」の意味で使用されていることが分る。勿論, 妃の館としての é-mí も度々出て来る。例えば DP 81 では: 1 udu maš-da-ri-a En-abzu-a-gin gal-ukù-ka Bár-nam-tar-ra é-mí-a mu-na-túm,……とあるように, ensí 妃への maš-da-ri-a²⁵⁾ は é-mí に持って行かれたし, DP 191 によれば, Barnamtarra

の行う *síg-ba* 「羊毛分け」は *é-mí* から分けられた。また Lugalanda 治世 I 年と考えられる TSA 43 では、358 *gar-dù-a* の *giš_hhašhur* を主たる内容とする果実を *nu-sar* たちが届けてきたが、それを *nu-bànda* の *Dun-me* が持って行った先は *é-mí* であった。ウルカギナ時代には *é-mí* という表現は少なくなるが、Fö 108 では末尾に *Šag_s-šag_s* の名があるが、*nu-sar* の *Dingir-a-mu* が「バウ神所有」の野菜を *é-mí* に届けている。*é-mí* は妃の宮殿ないし妃の世帯の意味であった。

ところでさらに、同じ *Dingir-a-mu* の名が出て来る次のタブレットに注目しよう。

DP 107

I	3 ¼ + ¾	<i>zú-lum gur-sag-gál</i>	}	
	60	<i>gar-dù-a giš_hhašhur, ½</i>	}	
		<u><i>En-kisal-si nu-sar Lagaš^{ki}-kam</i></u>		
	70	<i>gar-dù-a giš_hhašhur, ¾</i>	}	II <i>É-tur_s</i>
	80	<i>gar-dù-a giš_hhašhur, 20 gar-dù-a giš_{peš},</i>	}	
		<i>¾ geštin</i>	}	
				<u><i>E-ta-e^{ti}</i></u>
	60	<i>gar-dù-a giš_hhašhur, 50 gar-dù-a giš_{peš},</i>	}	
III	¼	<i>geštin</i>	}	
				<u><i>Ur-ki</i></u>
	50	<i>gar-dù-a giš_{peš}</i>		
		<u><i>Dingir-a-mu sar Gír-su^{ki}-kam, ^dBa-úⁱ-kam</i></u>		
	50	<i>gar-dù-a giš_hhašhur</i>		
		<u><i>IV Nimgir-ab-zu sar-nam-DUMU-ensí-ka-kam</i></u>		
	3 ¾	<i>zú-lum, 10 gar-dù-a giš_hhašhur,</i>	}	
	20	<i>gar-dù-a giš_{peš}</i>	}	
		<u><i>V Ur-pu sar Lagaš^{ki}-kam</i></u>		
	20	<i>gar-dù-a giš_hhašhur</i>		
		<u><i>Zag-mu sar Gír-Su^{ki}-kam, Ur-tar-kam</i></u>		

各項の記載は以上で終りで、Unterschrift において *nu-sar ^dBa-ú-ke₄-ne mu-túm* 「バウ神の庭師たちが持ってきた」とあり、それらを倉庫 *é-níg-ga* に運んだ主語は

Šag₅-šag₅ dam Urukagina ensí Lagaš^{ki}-ka (-ke₄) となっている。Urukagina の ensí 治世 I 年の igi-nu-du₈-giš 「果樹園の igi-nu-du₈」 への še-ba (STH. 1. 15, U. ensí I-6 ba : še-ba igi-nu-du₈ šâ-dub-didli ^dBa-ú)²⁶⁾ には Dingir-a-mu, É-tur₅, E-ta-e₁₁, Ur-ki, En-kisal-si の 5 人が代表受取人として現われる。DP 107 には、この 5 人の nu-sar の他に Nimgir-abzu, Ur-pu, Zag-mu の 3 人の nu-sar が現われている。DP 107 において、全く注釈的肩書をつけられなかった 3 人が凡て STH. 1. 15, 16 に出ていることは、DP 107 の末書に nu-sar ^dBa-ú-ke₄-ne とあることと相対応し、かれらが純粋に é-^dBa-ú 所属 (従ってかつては é-mí 所属) の nu-sar であったことを示す。Dingir-a-mu は lú-kur₆-dab₅-ba-^dBa-ú への še-ba 表において、4 人～5 人の anonym の nu-sar に対する še-ba の代表受取人であって、Lugalanda 時代の Barnamtarra 所管の še-ba 表にも、5 人の nu-sar たちの代表受取人として現われる (RTC 54, III. Lugalanda VI, 2-ba)。そういう人物が sar Gír-su^{ki}-kam, ^dBa-ú-kam と注釈されていることは、今更ながら Gír-su^{ki} と é-^dBa-ú との深いつながりを感じせしめずにはおかない。

とすると最初に出て来る人物ではあるが、En-kisal-si nu-sar Lagaš^{ki}-kam は、それらの人々とは別の出身の人物ということになりはしないか。そのことは Nimgir-abzu 以下の種々の肩書をもつ nu-sar たちも、少なくとも一度はやがて Šag₅-šag₅ 所管の第 2 種の še-ba へ登場することと無関係ではなからう。後世まで Gír-su^{ki} と Lagaš^{ki} とが別の都市として区別されたことを思うと、é-mí—é-^dBa-ú は一般に広く考えられているように Lagaš^{ki} にあったのではなくて、Gír-su^{ki} にあったと考えるべきではなからうか²⁷⁾。

ともかくも ensí の意志によって、^dNin-gír-su の gemé や igi-nu-du₈ への ša-ba が、é-mí から出されることもあったことを記憶しておこう。結局 é-mí は é-^dNin-gír-su (in Gír-su^{ki}) や é-^dNanše (in Siraran^{ki}) と比肩するような²⁸⁾ 大組織の運営中心ではなく、かなり小さい世帯の中心であった。このこととバウ神の宗教的な地位の高さとは直接関係がないように見える²⁹⁾。そして規模の問題に関しては、ウルカギナの改革によって é-é-mí にバウ女神が入っても、それだけでは ensí 妃の管理する経済世帯の規模に、決定的な変革はおこらなかったように思われる。

En-èn-tar-zi, Lugal-an-da 時代のエンシ妃が支配管理する世帯と、Uru-ka-gi-na 時代のバウ神を中心とする経営体とが連続することは、以上の考察によっても明かであろう。ただ、だからと云って Urukagina 以前のそれをバウ神殿世帯と云い切ってしまう

ことも、事実を誤るものといわねばなるまい。以下便宜上簡略する場合には、改革以前を é-mí の世帯、以後を ^dBa-ú の世帯と呼ぶことにする。また両時代を通観する場合 é-mí の世帯と呼ぶこともある。

2

ここで、Ningirsu 神の名を冠せられた世帯の大きさを物語るもう 1 つの史料を引用しよう。これはテキストにも明かなように Urukagina のエンシ治世 I 年の記録である。

Nik 58

<p>I 682 ½ še-ba-gur-sag-gál šub-lugal- ^dNin-gír-su-ka</p>	<p>682 gur-sag-gál 72 sil, ニンギルス 神の šub-lugal (=「王の臣民」) への 大麦分け,</p>
<p>II Uru-ka-gi-na ensí Lagaš^{ki} 〔En-ig-gal〕 III nu-bànda e-ne-ba u₄-2-kam</p>	<p>ラガシュのエンシ, ウルカギナ, 執事〔エニガル〕が分けた; 2 日のである (?);</p>
<p>IV 4-ba-am₆</p>	<p>4 回目の分配である。</p>

ここでは 682 ½ gur-sag-gál という数と, še-ba...šub-lugal ^dNin-gír-su という formula が問題になる。ただこの場合は前節で取扱った še-ba gemé-dumu igi-nu-du₈ šà-dub-didli の場合と異なり, é-^dBa-ú では šub-lugal だけに対する še-ba リストはないようである。Barnamtarra—Šag₅-šag₅ の名を冠した文書群から判断すると, この人々こそ本来的戦士農民であったように思われる。すぐ後に明かになるように, 農夫を意味する普通名詞 engar はラガシュでは, 王国の支配者やその妃が支配する耕地の管理人の一種を指しており, その人数も一時に数人程度に限られていた。sag-apin³⁰⁾ や nu-sar もやはり é-mí の世帯の農業経営において, 指導的・管理的な仕事に当る, 少数の人々の呼び名なのである。Deimel も šub-lugal を Militarkolonen 「軍事植民」であって, 「一種の農夫」³¹⁾ であると解している。彼らの組織については, 第 3 章以下で触れるが, ともかく Urukagina の ensí 治世 I 年の第 2 回目の še-ba lú-kur₆-dab₅-ba ^dBa-ú である STH 1, 6 によると:

STH 1. 6³²⁾

<p>I 13 lú še-ba 1-gur-sag-gál</p>	<p>1-gur-sa-gál (ずつ) の še-ba 13人</p>
---	--------------------------------------

1 lú ½	1 人: ½ (gur-sag-gál),
še-bi 13 ½ Šeš-lú-dùg	それらの大麦 13 ½ (ク), (受取人) Šeš-lú-dùg;
9 lú 1 1 lú ½	9人: 1 (gur-sag-gál ずつ), 1 人: ½,
še-bi 9 ½ <u>É-me-lám-sir</u>	かれらの大麦 9 ½ (gur-sag-gál), (受取人) <u>É-me-lám-sir</u> ,
11 lú 1 1 lú ½	11 人: 1 (gur-sag-gál ずつ), 1 人: ½,
še-bi 11 ½ <u>Enim-ma-ni-zi</u>	かれらの大麦 11 ½ (gur-sag-gál), (受取人) <u>Enim-ma-ni-zi</u> ;
(²)/4 Ur-sag	(¹)/2 (gur-sag-gál): <u>Ur-sag</u> ,
(šub-lugal-me)	〔(以上の人々は) šub-lugal たち。〕
(11 lú 1), II 1 lú ½	11 人: 1 (gur-sag-gál) ずつ, 1 人: ½,
še-bi 11 ½ <u>Dam-dingir-mu</u>	かれらの大麦 11 ½ (gur-sag-gál), (受取人) <u>Dam-dingir-mu</u> ;
1 Di-ud	1 (gur-sag-gál): Di-ud
1 Ur- ^d -Nin-sar	1 (gur-sag-gál): Ur- ^d -Nin-sar
<u>uku-uš-me</u>	(以上 14 人は) uku-uš ³³⁾ たち。
.....

となっている。なおタブレットの末尾部 (cols. XII~XIII) の総括によると: **XII** šu-nigín (合計) 67 lú še-ba 1 gur-sag-gál, 8 lú ¾, 9 lú ½+¾, 64 lú ½, 2 lú ¼+¾, 5 lú ¼+(¾), 5 lú ¼, 2 lú ¾; **XIII** [gū-an]-šè 1〔6〕2 lú še-ba-tur-mah-ba, še-bi 115 gur-sag-gál, še-ba-lú-kur₆-dab₅-ba ^dBa-ú……となっている。分配者 (e-ne-ba の主語) は Uru-ka-gi-na ensí Lagaš^{ki}, 時は [itu? e] zen-bulùg-kú-^dNanše (-ka) 「ナンシェ女神の(ために) 搗麦を食う祭 [の月?]」, 支出倉庫は ganun-sar ((鳥=現場(?) の倉庫)) である³⁰⁾。

この tablet での šub-lugal は 3 隊 36 人と Ur-sag の計 37 人で, その še-ba は 35 gur-sag-gál である。ただし, 筆者の手にある 12 枚のこの種の še-ba は, 本文書を除いて凡て最多量の 1 人当りの še-ba が 72 sil (=½ gur-sag-gál) となっている。

ウルガキナの ensí 治世 I 年のもので利用できる še-ba 表はこれのみであるために、同年の še-ba-lú-kur₆-dab₅-ba がすべて、本タブレットに準じたかどうかは不明である。改革的新支配者の出現という特殊事情を考えると、この年の še-ba-lú-kur₆-dab₅-ba の少なくとも何回かが平生よりも多かったことが考えられる。STH 1. が 2 回目の še-ba であることも考慮されねばならない。結局 Nik 58 で še-ba を受けた šub-lugal-^d-Nin-gír-su の人数は $682 \times \frac{37}{5} = 721$ 人前後（ないしその 2 倍：1443 人前後）であろう³⁴⁾。

šub-lugal-^d-Nin-gír-su には、理論的には lú-kur₆-dab₅-ba-^d-Ba-ú である šub-lugal も含まれるが、Fö 168 の例に従ってこの場合は、ニンギルス神を名目の直接の支配者とする組織の šub-lugal だけと考えることができる。何れにしてもそれは、バウ神の世帯の še-ba 表の šub-lugal の 18.5~19.5 倍の人数で、gemé-dumu, igi-mu-du, šà-dab-didli の場合の 20 倍とほぼ一致する。この数字がどの程度の全体性を持つかは軽々に断定できないが、é-mí 文書の表面に現われる人々と同範疇の人々がニンギルスの名によって、é-mí の世帯の人々よりも遙かに多数、組織されていたことだけは疑いない事実といわねばならない。そして STH 1,6 においては uku-uš を加えても全 lú-kur₆-dab₅-ba の 30% であるので、この比率でいけばニンギルス神の直接配下の lú-kur₆-dab₅-ba は、Urukagina の ensí 治世 I 年において 2370 人余となる。

神の名において管理される人々を 6000 人以上も有している、1000 人に近い農民軍人を含む二千数百人を割当地保有自由市民³⁵⁾として持っている世帯が Telloh—Gír-su^{ki} にあったと推定することができるのである。こうした関連づけはまだ試論の域を出ない。しかし é-mí 文書がただ数百人の人々を直接動かす世帯だけのことを語っているだけでなく、全 Lagash 都市王国の中で息づいていた姿を蔵していることは、ほぼ明かにし得たと思う。

しかし、タブレットに一再ならず現われる é-mí 所属の数百人の人々がどのように組織され、どのような固定度をもち、またそれを中心としてその背後に見えかくれする人々をどの程度持っていたか、などについて、諸種のテキストの間の identification によって明かにすることこそ、先学の研究を基礎としてこの文書群の本来の特色を生かすみちであることはいうまでもあるまい。そこで次に一見軍事とは関係のない職名の者が軍事関係文書に現われる問題について、1, 2 の例を取上げてそのような操作を行なってみよう。

第2章 engar-ki-gub とその軍事・労働記録への出現

先ず ウルカギナ王治世 IV 年の「バウ人」^{ぶと} lú^d-Ba-ú の戦(?) 死者名簿をみてみよう。

DP 138

I 1 Lugal-pa-è engar ba-ug₇, 1³⁶⁾ Ti-ra-áš-a dumu-ni ì-KU,
lú-dun-a Ur-sag-kam.

1 Lugal-nanga-ra-ná, 1, . . . , 1 . . . , II 1 . . . ba-ug₇-ge; }
1 Lugal-a-mu ba-ug₇, 1 An-na-ne-kúš [a] b-ba-ni ì-KU, }
1 Ur-ki ba-ug₇, 1 Me-an-ni-si dumu-ni ì-KU }

lú-dun-a Ur^d-Šè-nir-da-ka-me.

III 1 Ê-nam, 1 Ú-kaš ba-ug₇-ge; }
1 Nam-maḥ-ni ba-ug₇, 1 Nam-gu dumu-ni ì-KU; }

lú-dun-a Enim-dug₄-me.

1 Ur-gú-edin-na, 1 Dingir-ur-mu, ba-ug₇-ge; }
1 Utu-ì-kúš ba-ug₇, 1 IV^d-Sukal ab-ba-ni ì-KU, }
1 Lugal-níg-pisan-ni ba-ug₇, 1 (∇) Gum-ku-šè dumu-ni ì-KU; }

lú-dun-a Ê-nam-me.

1 Ú-ú, 1 Ur-ki ba-ug₇-ge; }
1 Dí-m-ni ba-ug₇, 1 Utu-dím-a-ba-šag₅ V dumu-ni ì-KU; }

lú-dun-a Šeš-lú-dùg-me.

1 Ur-šubur, [1] Lugal-me ḥar-tud-ni ì-KU;

[1] Gala-tur, [1] ḥar-tud-ni ì-KU;

1 A-?-?, 1 ibila³⁷⁾ (=dumu-nita) ì-KU;

lú-dun-a VI Ê-me-lám-sir-me.

1 Ad-da, 1 Zi-mu ba-ug₇-ge;

1 Ur^d-Nin-mar^{ki} ba-ug₇, 1 (∇) Íd-lú šeš-ni ì-KU;

lú-dun-a Enim-ma-ni-zid³⁸⁾-da-me.

VII šub-lugal-me.

1 Ur-abzu, 1 Gala, 1 Amar-ki, 1 Im-su-su-ga, 1 Zag-mu, 1 Ú-ú,
 lú-dun-a Amar-ki-me;

1 Lugal-? šag₅, 1 Ur^d-Nin-gír-su

lú-dun-a ^{VIII} Dam-dingir-mu;
uku-uš-me³⁹⁾ ba-ug₇-ge.

IX šu-nigín 20 lú lú-nu-tug, 11 lú lú i-tug, lú^d-Ba-ú-me ba-ug₇-ge,

šag₅-šag₅ dam Uru-ka-gi-na lugal Lagaš^{kt}-ka, En-ig-gal nu-bànda mu-bi-šè
 e-sar. IV.

はじめの3項だけ訳出すると――

I engar のルガル・ペエが死んだ (ba-ng₇: sing.); その子 (dumu-ni) のティラ
 アシュアが (跡を) ついだ (i-KU (=dīb?))⁴⁰⁾; ウルサグの配下の者 (lú-dan-a)
 である。

ルガル・ナンガラナ, ……………, ……………,

II ……(計4人) が死んだ (ba-ug₇-ge: pl.);

ルガル・アムが死んだ, その父アンナネクシュがついだ; ウルキが死んだ, その子
 メアンニシがついだ;

ウルシェニルダの配下の者である。

III エナム, ウカシュが死んだ; ナムマフニが死んだ, その子のナムグがついだ;
 エニムドゥグの配下の者である。

以下の本文は上の訳を参照すれば, 同じ構成の繰返しなので自ら明らかであろう。た
 だし Enim-ma-ni-zid の配下の者のあとで「(以上は)『王の臣民』šub-lugal たち」と
 一括されていること, およびそれに続く Amar-ki, Dam-dingir-mu の配下の者たちが
 uku-uš-me と一括されているように読みとることができること, の2点が注意を要す
 る。

なお šu-nigín 以下の Unterschrif は――

合計 20 人は人 (=後継者) を取らず,

11 人は人 (= ク) を取った,

パウ神の人々が死んだ。

Lagaš の王 Urukagina の妻 šag₅-šag₅; 執事のエニガルがその名簿に記入した。
 治世 IV 年。

となっている。

召集記録である Nik 3; DP 135 などでは召集者が国王 Uru-ka-gi-na であるのに対して、この戦死者およびその後継者リストの Unterschrift の責任者が Ba-ú 女神を所有者とする世帯の支配者、王妃 Šag₅-šag₅ であるのが目をひく。そこにも実体を伴う一つの管理組織の存在が看取される。

戦死者 31 人のうち 23 人が šub-lugal, 8 人が uku-uš であると考えられるまとめ方である。このタブレットに現われるような lú-dun-a X「X の配下の人々」という組織を中心として編成される「バウ人」の部隊は、VAT 4681 (Or. 26, pp. 36~39), Nik 3; DP 135, 136 などによると、100 人乃至 184 人である。そのうちの 30 人が死ぬというような高率の「死」は戦死以外には考えられない。ダイメル以来、戦死者名簿とされてきた⁴¹⁾のも当然であろう。

ところで戦死者 31 人の全部を、テキストのまとめに基いて šub-lugal および uku-uš と考えて間違いでないであろうか。その答はしかく簡単ではない。

問題は、この戦死者リストの最初の人物 Lugal-pa-è とその職名 engar にある。engar という文字は、apin=鋤, úru=耕す, absin=うねと同じ文字で、engar と読むときは農夫を示す。Deimel はこれを Bauer, Genouillac は cultivateur (耕作者, 農夫), Rosengarten はダイメルの訳をうけて paysan (百姓, 農民) と訳している⁴²⁾。engar が一般的に農夫を表わしたことは例えば、後世に伝わった諺 šà-bi-zi-ga ugula nam-me, sipad engar nam-me「?は監督になろうとするな, 牧人は農夫になろうとするな」⁴³⁾によっても明瞭である。しかし少なくともこの時代の Lagash の行政・経済文書にあっては、それは1つの独立した title と解さねばならない。

DP 87 をとってみよう。これは Lugalanda 治世 V 年の日付を有する maš-da-ri-a「捧げもの」「贈物」の小記録である。

DP 87

I (1 maš) maš-da-ri-a Šeš-lú-dùg	小山羊 1 頭の捧げ物, シェシユルドゥグ
1 maš ^d -Bàd	小山羊 1 頭 バド
1 maš É-me-lám-sir	小山羊 1 頭 エメラムシル
II 1 maš Enim-ma-ni-zi(d)	小山羊 1 頭 エニムマニジ (ド)
ugula-me ⁴⁴⁾	たばねたちである。

1 maš Ur-dam	小山羊 1 頭 ウル・ダム
1 maš Búzur-ma-ma	小山羊 1 頭 ブズル・ママ
1 maš Lugal-maš-su	小山羊 1 頭 ルガル・マシュス
1 maš Gala-tur	小山羊 1 頭 ガラ・トゥル
III 1 maš Ur-du ₆	小山羊 1 頭 ウル・ドゥ
1 maš Lugal-pa-è	ルガル・パエ
engar-me	「エンガル」たちである。
1 maš En-tur ₅ sipa-ama-gan-ša	小山羊 1 頭, 「はらんだ 驢馬の 牧者」 エン・トゥル。
IV šu-nigín 11 maš maš-da-ri-a-ugula-ne	合計 11 頭の小山羊, たばね達の贈物,
ezen-še-kú ^d -Nanše-ka	ナンシェ女神の(ために)麦を食う祭 に際して。
V Bár-nam-tar-ra dam Lugal-an-da	ラガシュのエンシ, ルガルアンダの妻
ensí Lugaš ^{ki} V	バルナムタルラ。治世 V 年。

šu-nigín「合計」以下のタブレット末尾の総括において, maš-da-ri-a-ugula-ne 「『たばね』たちの贈物」と一括されているが, 上記の transcription および翻訳によって, 実際には 4 人の ugula, 6 人の engar, 1 人の sipa-ama-gan-ša が夫々 1 頭ずつの小山羊を, エンシ妃 Barnamtarra に捧げていることが分る。この種の一括の仕方はシュメール経済文書に頻繁に現われる形式である。この場合 a) 3 つの title うち後 2 者が, ときに最初の title とは独立して現れるが, 広く考えればそれに含まれる場合, b) 3 者夫々別々の title であるのに便宜上最初の title で代表される場合, c) 最初のものは例外的ではあるが, そこに含まれていることが重要な意義をもち, 後 2 者のうち代表的な title で全体を代表させる場合, の 3 つの case がある。特に ugula-ne と一括される場合には a) の可能性が強いことをあらかじめ指摘しておこう。このことは, 次章において ugula の実体について触れるとき, 問題となるであろう。

ともかく DP 87 では 6 人の engar のグループの最後に Lugal-pa-è の名が出て来る。それは 戦死者名簿が書かれた Urukagina 王の治世 IV 年よりも, 7~8 年前の Lugalanda の治世 V 年のことであった⁴⁵⁾。

ところが, 同じグループはまた engar-ki-gub-me とも呼ばれた。たとえば Nik 173, II₅~III では:

II 1 maš Ur-dam	小山羊 1 頭 ウル・ダム
1 maš Lugal-maš-su	小山羊 1 頭 ルガル・マシュス
III 1 maš Gala-tur	小山羊 1 頭 ガラ・トゥル
1 maš Búzur-ma-ma	小山羊 1 頭 ブズル・ママ
1 maš Ur-du ₆	小山羊 1 頭 ウル・ドゥ
engar-ki-gub-me	「土地管理(?)の農夫」 ⁴⁶⁾ たち。

この Nik 173 も DP 87, Fö 60 などと同種の maš-da-ri-a 記録で、日付は Lugalanda の治世 II 年である。

次に Urukagina 時代か Lugalanda 時代かは断定できないが、そのどちらかの治世の IV 年の kin-dù-a (労役奉仕) の記録⁴⁷⁾に、同じ人名グループについて、再び engar-ki-gub という職名が見られる。

DP 646

I 1 éš · 5 gi kin-dù-a Ur-dam	25 gi の労役 (=字義通りには「作り仕事」) ウル・ダム
1 ½ éš Lugal-maš-su	30 gi (の仕事) ルガル・マシュス
1 éš · 2 gi Búzur-ma-ma	22 gi (の仕事) ブズル・ママ
II 1 éš Gala-tur	20 gi (=1 éš) (の仕事) ガラ・トゥル
1 éš · 5 gi Ur-du ₆	25 gi (の仕事) ウル・ドゥ
engar-ki-gub-me	土地管理(?)の農夫たち、
III šu-nigín 60 gar-du · 2-gi	合計 122 gi (1 gar-du=2 gi) (=240.24 m) の
kin-dù-a íd-gán-Šeš-dù-a,	シュエドゥア 耕地の水路の作り仕事、
šá-íd-da šu-làḫ-ag-dam	水路の中で手が洗われた。
engar-ki-gub-ke ₄ IV e-KU	土地管理(?)の農夫が(労役に)服した。
En-ig-gal nu-bànda ú-íd-maḫ-ta	執事のエニグガルガ「大水路の ú」から
šà-gán-ga-šè mu-ne-dù IV	丘状の耕地の中まで造った。IV 年。

DP 87 や Fö 60 の engar が Nik 173 や DP 646 の engar-ki-gub であることはかくて明白である。もっともこのことは、Deimel によって早くから指摘されていた。しかし以上の4つのタブレット及び後で問題にする Nik 3 (Uruk. V) を通じて、Lugalanda 治世 II 年から Urukagina 王治世 V 年の間に、Lagash の支配者妃が行政管理した世帯において5人ないし6人の engar が、上記のある程度固定した人々を実際の内容として活動していたことは改めて確認しておく必要がある⁴⁸⁾。

というのは še-ba-lú-kur₆-dab₅-ba^d Ba-ú との関連の問題である。kur₆ (=kurum = ku(r)=kú?) はもとパン、食糧 (Nahrung) などを意味したらしいが、遅くともこの時期には、Nahrungsland (食封地), Arbeitslos (働き分), Prabunde od. Pfründe (扶持) を意味した⁴⁹⁾。この広く受容れられた解釈とほぼ同じ考えがフランスでも古くから採用されてきた。例えば Documents présargoniques の著者 Allotte de la Fuÿe は、kur₆-ensí という表現に関して、「それ (すなわち kur₆) はアッシリア語の *kur-matu*, すなわち食糧 (nourriture), 生計費 (entretien) である……。私はこの sug PA · TE · SI は、彼の配下の人々 (son personnel) の生計を維持するために彼に与えられる財産を含むと考えたい気持になっており、歳費 (dotation) と訳す」と云っている⁵⁰⁾。

lú-kur₆-dab₅-ba の kur₆ がこのような性質のものであることをあらためて確認した上で、engar にかえろう。次にかかげるのは Urukagina 王治世 VI 年の第6回の še-ba-lú-kur₆-dab₅-ba の最初の部分である。

DP 121

<p>I [3] lú-še-ba $\frac{8}{24}$ engar-ki-gub-me</p> <p>4 ri-ḥu $\frac{8}{24}$</p> <p>$\frac{8}{24}$ Qàl-si</p> <p>$\frac{8}{24}$ ^d·Nanše-da-nu-me-a</p> <p>ugula-ki-síg-ka-me</p> <p>$\frac{8}{24}$ Lugal-pa-è sipa-šah</p> <p>13 lú $\frac{8}{24}$, [2] lú $\frac{7}{24}$</p>	<p>[3] 人 : 1 人 48 シルずつの大麦分け、 土地管理 (?) の農夫たち、</p> <p>4 人の鳥捕り、48 シルずつ、</p> <p>48 シル、カル・シ</p> <p>48 シル、ナンシェダ・ヌメア</p> <p>(以上 2 人は) 羊毛場の監督たち、</p> <p>48 シル : 豚飼 (責任者) のルガル・パエ</p> <p>48 シル (ずつ) 13 人 : 42 シル (ずつ)</p> <p>[2] 人</p>
---	---

$1\frac{1}{2}$ (*in cuneiform*) Ur-sag

še-bi $8\frac{1}{4}+1\frac{1}{2}$ (*in cuneiform*) gur-
sag-gál Ur-sag

72 (楔形文字で) シル: ウル・サグ

それらの大表は8グルサッガル36シルと72シル(楔形文字で); ウル・サグ;

še-ba を計算してみると;

$$((3) \times 48 \text{ sil}) + (4 \times 48 \text{ sil}) + 48 \text{ sil} + 48 \text{ sil} + 48 \text{ sil} + (13 \times 48 \text{ sil}) + (2) \times 42 \text{ sil} + 72 \text{ sil (in cuneiform)} = 8 \text{ gur-sag-gál } 108 \text{ sil}$$

となり、この計算によって、engar-ki-gub や豚飼いを含む合計24人のグループが、Ur-sag を長として一隊をなし、かれらのše-ba を Ur-sag が代表受取したことが分る。これは計算がグループの上限を明かにする例である。engar-ki-gub と「羊毛を処理する女たちの監督」ugula-ki-sig-ka と「豚飼い」が、一人の代表受取人の下に一括されるのはどういう場合であろうか。それは kur₆-ensí gán-níg-en-na の耕作・収穫、運河造りや城壁造りなどの賦役の場合か、それとも戦争、防衛守備、ないし軍事訓練など軍事に関係のある場合に違いない。

第1種še-ba表の場合、豚飼いやengar-ki-gubや女たちの監督が、常にこのようにšub-lugalと結合した形で大表を受けとった訳ではない。Urukaginaの治世III年よりも以前には、これらの人々はšub-lugalやuku-ušとは区別されて、夫々個々ないし職業別に記載されており、軍人による代表受取を受けていない。そしてUr-sagも、ウルカギナ王のensí治世I年からlugal治世II年に至る3年間にはšub-lugal-meと一括されるグループの最後の方に、代表受取人としてでなく、72silUr-sagという形で出て来る。この人物は、前の支配者Lugalanda時代のše-ba表には姿を見せていない⁵¹⁾。engar-ki-gub, ri-ḥuがUr-sagのグループに入るのはUrukaginaの治世III年にはじまる。治世IV年の戦死者名簿にLugal-pa-è engarが入っているのもうなづけるわけである。他方、engar-ki-gubおよび「鳥捕り」の他に、豚飼いなどがUr-sagの代表受取のもとに入るのは、手元にあるše-ba表ではUrukagina王の治世VI年になってからである。もっとも治世IV, V年のこの種のリストはないが、おそくとも治世V年には、この種の受取り方をしていただであろう⁵²⁾。

しかも、この種の組合せのグループは現在のところ、kin-dù-aなどの実際の労役記録には見当たらないで、軍事組織と関連するタブレットに見られるのである。

Nik 3

I 1 Gu-ú	1 人	グ・ウ
1 Lugal-maš-su	1 人	ルガル・マシュス
1 Gala-tur	1 人	ガラ・トゥル
1 Lugal-ne-nu-um	1 人	ルガル・ネヌム
1 Ur-du ₆	1 人	ウル・ドゥ
engar-me		(土地管理(?)の)農夫たち,
1 Qàl-si	1 人	カルシ
1 ^d Nanše-da-nu-me-a	1 人	ナンシェダ・ヌメア
ugula-ki-síg-ka (úr になっている)-me		羊毛場の監督たち,
1 Lugal-pa-è sipa-šáḫ		豚飼いのルガル・パエ,
1……, (以下4人) ^{II} ri-ḫu-me	1 人…	…鳥捕りたち,
1 Ur- ^d En-ki	1 人	ウル・エンキ
1 Lú- ^d Ba-ú	1 人	ル・パウ
lú-Ur-sag-me		(上の2人は)ウル・サグ配下の人々,
1 Sig- ^d En-líl-li	1 人	シグ・エンリルリ
1 Ur-ki	1 人	ウル・キ
1 Lugal-kur	1 人	ルガル・クル
lú Enim-dug ₄		(以上3人は)エニム・ドゥグ配下の 人々,
1 É-mu-kaš-dùg	1 人	エム・カシュドゥグ
1 É(?)-lú	1 人	エ・ル
1 É-ur	1 人	エ・ウル
lú É-nam-me		(以上3人は)エ・ナム配下の人々,
1 ?	1 人	………
lú Šeš-lú-dùg		(上の1人は)シェジュールドゥグ配下の 者,
1 Ur-sag ugula	1 人	長 ^{わき} のウル・サグ
šu-nigín 23-lú Ur-sag ugula-bi		合計 23 人, その長はウル・サグ

DP 121 では 24 人であるのに対して, この軍事記録では 23 人であり, engar の数や

šub-lugal 配下の人々の数に少しずつ移動があるが、全体的構成としては符節を合わせたように重なりあう。双方のタブレットに、Qal-si と ^dNanše-da-nu-me-a の2人の羊毛場の監督、豚飼いの Lugal-pa-è, 数人の鳥捕りなどが組込まれていること、および DP 121 における Ur-sag による še-ba の代表受取りと Nik 3 における ugula Ur-sag を長とする班編成、——それらは見逃すことのできない両者間の緊密な対応を示している。

この Nik 3 を、先の戦死者リスト DP 138 と対照させてみよう。

DP 138 において、engar の Lugal-pa-è が Ur-sag の配下として戦死したことは、第1種 še-ba 表 DP 121 や、査閲名簿 Nik 3 の構成と明白に対応する。

しかるに、この engar ないし engar-ki-gub は DP 138 においてそうであったように、še-ba-lú-kur₆-dab₅-ba のリストや Nik 3 においても、šub-lugal-me と一括されるグループと微妙に密接する。即ち彼らは軍事組織や労役奉仕においては、1 兵士、1 奉仕者、1 賦役人として頗る謙虚な表われ方をし、その限りでは、独立した人格として表面に現われることの少ない多くの šub-lugal たちと変りないように見える。事実、多くの本来の šub-lugal に混じって、engar の Lugal-pa-è が広義の šub-lugal の1人として、戦死しているのである。そこで次に、彼らが engar (ki-gub) として、é-mí ないし ^dBa-ú の組織体での本来の仕事に従う場面を検討しなければならない。

例として戦死した Lugal-pa-è を取上げてみよう。

DP 585 (Urk. IV)

I 9 (iku) gán-sir-la-maš⁵³⁾ Dun-dun lú-ensí-gal

1 ½ (iku) gán-sir-la-maš E-ta-e₁₁

6 (iku) gán-sir-la-maš Nangar-rí-dug

2 (iku) gán-sir-la-maš Nimgir-si

II 3 (iku) gán-sir-la-maš Ki-ku-ni } (dam)-kàr-me

3 (iku) gán-sir-la-maš En-tur₅ sag-apin

6 (iku) gán-sir-la-maš Ur-ḫur-sar-ra III šudug-é-babbar

6 (iku) gán-sir-la-maš Amar-muš-a šudug-^dNanše

IV šu-nigín 2 (bùr) ½ (iku) gán-še-sir-la

gán-úru-lal Um-me-z(ag-nu)-si,

gán-ú-rum (^dBa-ú), En-ig-gal V nu-bànda mu-gíd,

Šag₅-šag₅ (dam Uru)-ka-gi-na lugal Lagaš^{ki}-ka, Lugal-pa-è engar-bi. IV.

さらに DP 532 では $g\acute{a}n-kur_6\text{-}\acute{s}e\text{-}sar\text{-}a$, $g\acute{a}nX\text{-}tug\ g\acute{a}n\text{-}sir\text{-}la$ からなる, 200 iku 以上の $g\acute{a}n\text{-}Da\text{-}tir\text{-}ambar^{ki}\text{-}kam$, ... $g\acute{a}n\text{-}G\acute{u}\text{-}b\grave{a}n\text{-}da\text{-}am$, $\acute{s}e\text{-}sar\text{-}a \cdot kur_6 \cdot \acute{u}ru\text{-}lal\text{-}g\acute{ı}d\text{-}da$ ^d $Ba\text{-}\acute{u}$ において, $En\text{-}ig\text{-}gal\ nu\text{-}b\grave{a}nda$ が検地したのに対して, $Lugal\text{-}pa\text{-}\grave{e}$ が $engar\text{-}bi$ となっている。DP 585 の人名が, この種の託営地タブレット以外, ほとんど $\acute{e}\text{-}m\acute{ı}\text{-}Ba\text{-}\acute{u}$ 文書に登場しない人々によって占められている⁵⁴⁾のに対して, DP 592 では, 2 $b\grave{u}r$ 1 iku $\frac{1}{4}$ $g\acute{a}n\text{-}sir\text{-}la$ を受託している $Lugal\text{-}pa\text{-}\grave{e}$ $engar$ 自身をはじめとして, 15 $\frac{1}{2}$ iku $g\acute{a}n\text{-}kur_6$ を保有する $Ur\text{-}sag\ gal\text{-}uk\grave{u}$ (cols. VI~VII), 2 $b\grave{u}r$ 6 iku の $g\acute{a}n\text{-}kur_6$ を保有する $Amar\text{-}ki\ ugula$ (VI (Rev. II)), 3 $\frac{3}{4}$ (iku) $g\acute{a}n\text{-}kur_6$ をもつ $Di\text{-}ud$ (col. VI) や 2 $b\grave{u}r$ 11 iku の $g\acute{a}n\text{-}10\text{-}tuk$ を受託する $gara\acute{s}$ など, $ugula$ 層や $gara\acute{s}$ の名前も見える。そのような土地における, $En\text{-}ig\text{-}gal$ を名目人とする検地に対して $Lugal\text{-}pa\text{-}\grave{e}$ は, 組織を代表する $engar\text{-}bi$ (その土地管理(?)の農夫)であった。また次のような場面にも彼が出てくる。

DP 391

I 565-sa $g\acute{u}\text{-}mun\ ki\text{-}sum\text{-}ma\ g\acute{a}n\ \acute{U}\text{-}gig\text{-}ka\text{-}ta\ \grave{i}\text{-}t\acute{u}m$,
 203-sa $g\acute{u}\text{-}mun\ ki\text{-}sum\text{-}ma$ **II** $g\acute{a}n\text{-}gibil\text{-}tur\text{-}ta\ \grave{i}\text{-}t\acute{u}m$,
 $En\text{-}ig\text{-}gal\ nu\text{-}b\grave{a}nda$ $\acute{e}\text{-}ki\text{-}sil\text{-}la\text{-}ka$ **III** $\grave{i}\text{-}t\acute{u}m$;
 230-sa $g\acute{u}\text{-}mun\ g\acute{a}n\text{-}Da\text{-}gir\text{-}ka$ $Ur\text{-}sag\ mu\text{-}sig_7$, $b\grave{a}d\text{-}a$ **IV** $mu\text{-}g\acute{a}l$;
 390-sa $g\acute{u}\text{-}mun\ g\acute{a}n\ Da\text{-}tir\text{-}ambar^{ki}\text{-}a\text{-}ka$ $Lugal\text{-}V\text{-}pa\text{-}\grave{e}\ engar\text{-}uru$ (or $r\acute{e}$) $mu\text{-}sig_7$,
 $Lugal\text{-}pa\text{-}\grave{e}\ e\text{-}da\text{-}g\acute{a}l$.

$g\acute{u}\text{-}mun\text{-}\acute{u}\text{-}rum\text{-}Ba\text{-}\acute{u}$; **VI** $\acute{S}ag_5\text{-}sag_5\ dam\ Uru\text{-}ka\text{-}gi\text{-}na\ lugal\ Laga\acute{s}^{ki}\text{-}ka$. **III**.

565 束の $g\acute{u}\text{-}mun$ (豆の一種), $Ugig$ の耕地から持っていった。230 束の $g\acute{u}\text{-}mun$, 小新耕地から持っていった。(以上を)執事の $En\text{-}ig\text{-}gal$ が $Ki\text{-}sil\text{-}la$ 倉庫へ運んだ。

230 束の $g\acute{u}\text{-}mun$, $Dagir$ 耕地で $Ur\text{-}sag$ がつくった。(それは)城壁にある。
 390 束の $g\acute{u}\text{-}mun$, $Da\text{-}tir\text{-}ambar^{ki}$ 耕地で (町の) $engar$ の $Lugal\text{-}pa\text{-}\grave{e}$ がつくった。 $Lugal\text{-}pa\text{-}\grave{e}$ のもとにある。

(以上全部は) Bau 女神所有の $g\acute{u}\text{-}mun$; ラガシュの王 $Urukagina$ の妃 $\acute{S}ag_5\text{-}\acute{s}ag_5$. **III**.

これら諸種のタブレットに出て来た $Lugal\text{-}pa\text{-}\grave{e}\ engar$ ($\text{-}ki\text{-}gub$) は, DP 138 で $ba\text{-}ug_7$ と記された $Urukagina$ の治世 IV 年を限りとして全てのタブレットから姿を消

す。彼が Lugalanda の治世 IV 年ごろに記録に姿を現わしたとき、何才であったか不明であるが、それから 7, 8 年後に死んだとき、lú-dun-a Ur-sag の後継者として、その息子をのこすことができたのは、DP 138 の示すとおりである。

以上本来の šub-lugal でない engar-ki-gub (-ak) がおそらく Urukagina の治世 III 年以降軍事組織の恒常的メンバーとなったことを見てきた。しかし šub-lugal 以外の様々な肩書をもつ「バウ人」が、市民軍的構成⁵⁵⁾をもつ Nik 3 には登場した。そしてそこには更に 43 人の各種の「職人たち」giš-kin-ti-me が含まれている。この職人たちは軍事組織と関係があると思われる VAT 4681 (Urukagina II 年)⁵⁶⁾に既に 8 人出て来る。その中 7 人が Nik 3 に出てくると同じ人物なのである。即ち後に大量に軍事組織に参加した職人たちの一部は既に Urukagina の治世 II 年から軍事組織に関係していたらしい。その giš-kin-ti がそれよりも遙か以前に戦争に出ていた記録が思いがけぬところに見出される。

それはニンマル神の sangu ル・エンナ Lú-en-na が sangu ^dNin-[gír]-su であった [En]-e-tar-zi にあてた書簡の一節である⁵⁷⁾。それによると Lagaš^{ki} から戦利品を奪った 600 人のエラム人 lú Elam^{ki} と彼は戦い、540 (=60×9) 人を捕えたらしい。そして 1 Ur-^dBa-ú lú-dun-a Níg-lú-nu-túm ugula simug-ka šà-ba mu-g[ál] (col. IV₂₋₆) 「鍛冶屋の ugula のニグルヌトゥムの配下のウルバウがその中にいました」。彼は ^dé-[Nin]-mar^{ki}-ka-ka e-díb 「ニンマル神殿で(守りに)ついていた」らしい。この ^dé-Nin-mar^{ki} の組織は DP 123 にも出て来る。それによると、44 人の lú-^dNin-mar^{ki}-ka-me である šub-lugal が、バツバル神殿の sangu 配下の人々 lú-sangu-^dbabbar-ka-me である 25 人の šub-lugal と共に、Urukagina の王妃 Šag₅-šag₅ から、É-ad-da で行なった仕事の代償として、パンの分配を受けている。^dé-Ba-ú (ないし ^dé-mí) と ^dé-Nin-mar^{ki} は、両者が或程度離れた所にあったにも拘らず、密接な関係があったと考えられる。

そこで筆者の作成しつつある ^dé-mí—^dBa-ú 文書の人名リストに彼の名前を探してみると、še-ba-igi-nu-du₈ (・íl), šà-dub-didli の中に興味ある書式のもとに登場する。というのは ša-dub-didli の中の giš-kin-ti-me において、5 人ないし 4 人の、これらの表で še-ba をもらっている simug が、Níg-lù-nu-túm e-da-sig₇ として記載されているからである。前に論証したように³³⁾、こうした形で出てくる Níg-lù-nu-túm のような場合には、彼もまた simug であり、かつ simug の中でも重要な位置をしめ、多く

の場合 $lú-kur_6-dab_5-ba$ である。 $še-ba-lú-kur_6-dab_5-ba$ には $simug$ がはじめ 2 人、Urukagina の治世末期には 4 人出て来るが、残念ながらそれは人名を伴わない。Enentarzi への手紙と $še-ba$ 表との間には、Lettre の治世 V 年が Entemena ののものであると 20 年以上をへだてており、 $Níg-lú-nu-túm$ や $Ur-d_4-Ba-ú$ が後年の軍事的記録に現れないのは当然かもしれない。何れにせよ、鍛冶屋のたばねとしての $Níg-lú-nu-túm$ が同一人である可能性は大きい。なお $Ur-d_4-Ba-ú$ という名も、RTC 24 (U. or L. ? IV) に農具の仕事をしている $Ur-d_4-Ba-ú simug$ として現われている。ともかく Enentarzi—Entemena 時代に $é-d_4-Nin-mar^{ki}$ に駐屯した人々の中に狭義の $šub-lugal$ ならぬ $simug$ がいたことは、記憶に値する。

市民軍的構成をもった軍隊編成記録は Urukagina の治世の後半にいたって漸く現われるのであるが、軍事組織の市民軍的な性格の一端は、 $engar$ についてみれば Urukagina の治世 III 年にすでに現れており、 $simug$ についてみれば Enentarzi の $sangu-d_4-Nin-gír-su$ 時代に遡る。もちろん、組織化の程度は Urukagina 治世後半に至って格段に進むけれども、 $ensí$ 妃の管理する世帯の中堅的な働き手が軍事組織の 1 員として時に広義の $šub-lugal$ に数えられることもあるという関係は、Enentarzi 時代に遡るのではなかろうか。この点に関しては、その治世 II 年の日付をもつ、後の $lú-kur_6-dab_5-ba$ に対する $zíz-ba \dots ezen-d_4-Ba-ú-ka$ の原型と見られる分配記録が、 $še-ba-zíz-ba lí-ígí. LAGAB šub-lugal-ke_4-ne$ と総括されているのが注目される⁵⁹⁾。DP 138 や Nik 3 や DP 121 において $engar-ki-gub, ri-ḥu, ugula-ki-síg-ka$ などが狭義の $šub-lugal$ とならんで $šub-lugal-me$ 「 $šub-lugal$ たち」と一括されることと、この Hackman, SAAT 347 において $šub-lugal$ と各項で明記される人々が 1 人も出て来ないのに、Unterschrift で上述のような一括がなされていることとは、密接な関連をもつと考えねばならない。

$engar-ki-gub$ はエンシ妃の管理する世帯の農業経営において検地に立会い、収穫物の倉庫への納入に責任をもつ少数の下級管理者的なグループであった。しかし彼らは、Urukagina 治世の後半の $še-ba$ 表や軍事組織記録においては、嘗て彼らの指揮に従ったであろう人々と並んで、一兵士・一奉仕者として登場する。この時期の Umma の $Lugal-zag-gi-si$ との fatal な戦争が、組織的軍隊編成記録の出現の背景をなしていたことは確かであろうが、一方では、Enentarzi から Lugalanda にかけての時代に既に、徐々に支配管理組織が王宮や神殿を核として整いはじめ、社会経済組織と軍事組織とが

組織的に結合されつつあったという事情も作用していると思われる。

戦死者名簿に見えた1人の engar の発見を発端として、多くのテキストにおいて šub-lugal とは明確に別のグループとなされながら、幾つかの軍事テキストでは狭義の šub-lugal の周辺にあって、それと混淆する現場管理者の存在を本章では実証してきた。そこで次章では狭義の šub-lugal の内部に立入って、ugula の下での統率の問題や še-ba 表での人数を遙かに上廻る人数が背後に存在している問題、及び sag-apin などの労働組織との重複の問題など、ラガシュ王国の軍事・労働組織の中心的問題に進みたい。

(本稿は 39 年度文部省科学研究費による成果の一部である。)

(筆者は京都府立大学文家政学部助教授)

註

- 1) Th. Jacobsen, Primitive Democracy in Ancient Mesopotamia, *Journal of the Near Eastern Studies* (JNES) II, 1943, pp. 159~72; Early Political Development in Mesopotamia, ZA, N. F. XVIII, 1957, pp. 91~140. А. И. Тюменев, Государственное Хозяйство Древнего Шумера, 1956. なお拙稿「シュメール都市国家の労働組織について—ラガシュのパウ神殿と自由人および奴隷との関係を中心に—」(『西洋史学』No. 48 所収)「はしがき」及び註 ①~⑨ 参照。
- 2) И. М. Дьяконов, Общественный и Государственный строй Древнего Двуречья-шумер, 1959. 英文要約 Society and state in ancient Mesopotamia—Sumer pp. 291~299.
- 3) それは1920年代に 'Orientalia' (略号 Or.) 誌上に連載された, transliteration と注釈を主とする多数の論文を基にして, 1931年, Šumerische Tempelwirtschaft zur Zeit Urukaginas und seiner Vorgänger, *Analecta Orientalia* II としてまとめられた。
- 4) A. Deimel, Wirtschaftstexte aus Fara (Inschriften von Fara III), 1924; R. Jestin, Tablettes sumériennes de Šuruppak, 1937; E. Burrows, Ur Excavations Texts II, Archaic Texts, 1935; A. Falkenstein, Archaische Texte aus Uruk, 1936.
- 5) Дьяконов, *op. cit.*, English Summary 参照。
- 6) 「売買契約泥章から窺った初期王朝期~アッカド王朝期の土地所有形態」(『史林』42巻3号, 1959年), 「シュメール土地制度における託営地について—折半小作と開拓地—」(『西洋史学』No. 50, 1961年), 「シュメール土地制度について—初期王朝時代まで」(『人文』〔京都大学教養部〕9, 1963年), 「シュメール都市国家と「国土」の人口について」(『西南アジア研究』10, 1963年), 「ケンギル都市同盟について—初期メソポタミア史の一問題」(『史林』47巻1号, 1964年)。
- 7) 「UET II 371 文書の解説とその解釈—軍事的集團労働組織: 治水と王権の起源」(『西南ア

シア研究』14, 1965年)。

- 8) Дьяконов の著書は、まさにこの観点の可能性を実証するものであった。
- 9) Yvonne Rosengarten, *Le concept sumérien de consommation dans la vie économique et religieuse*, Paris, 1960: avant-propos 参照。この大著で著者は kú (=食う) という動詞の様々な意味を、同じ意味でこの文字が出てくる各種のタブレットを集めて「科学的に」明らかにしていくという態度を一貫させている。その結果、著者の直接の目的とは離れて、幾人かの人名の identification を論じたり、職名や倉庫名や月名の整理なども行なっている。Deimel の Lagash に関する仕事の直接的かつ批判的継承者として注目される業績である。なお副題に *Étude linguistique et sociale d'après textes présargoniques de Lagaš* とある。
- 10) 例えば Rosengarten, *ibid.*, p. 27, n. 1 での é-ki-sil-la の機能についての言及をみよ。
- 11) W. Förtsch, *Altbabylonische Wirtschaftstexte aus der Zeit Lugalanda's und Urukagina's*, Leipzig, 1916. 12) 1 gur-sag-gál=144 sil=121 l. (Or. 7, p. 19).
- 13) H. de Genouillac, *Tablettes sumériennes archaïques—Matériaux pour servir à l'histoire de la société sumérienne* (以下 TSA と略す), 10.
- 14) VAT 4416 および VAT 4628. cf. P. Deimel, *Die Lohnlisten aus der Zeit Urukaginas und seines Vorgängers: I. še-ba-Texte d. h. Gerste-Lohn-Listen 2)*, še-ba igi-nu-dù ša(g)-dub-aš-aš-Listen, *Orientalia* 34~35, pp. 43~51.
- 15) François Thureau-Dangin, *Recueil de tablettes chaldéennes*, Paris, 1903 の略号。
- 16) Cf. Urukagina, Cônes B (et C), IX₇₋₂₁ (VIII₁₆₋₂₇): é-ensí-ka gán-ensí-ka-ka ^aNin-gír-su lugal-ba ì-gin, é-é-mí gán-é-mí-ka ^bBa-ú nin-ba ì-gin, é-nam-DUMU gán-nam-DUMU-ka ^bŠul-šag-ga-na lugal-ba ì-gin. 「エンシの家、エンシの畝にその所有者 (=王) としてニンギルス神が入った。「妃の家」の家 (or 世帯) と「妃の家」の畝にその女主としてバウ神が入った。「幼い者」の家と「幼い者」の畝に、その所有者としてシエルシャガナ神が入った。」ここでの é-é-mí は、実祭の管理記録に出てくる é-mí と同じものと考えられる。ただし gán については、行政・管理文書にも gán-é-mí という表現がみられる。Cf. DP 574, VI. (なおここでは gán-é-mí-kam が kur₅-ensí-ka-kam と対置されている。) エンシ妃がバウ女神の名を伴わずに人々を管理・支配したことが、改革碑文のこの記述と相対応するのに対して、gemé-dumu ^aNin-gír-su の名が Lugalanda 時代末期に、依然として実際の管理記録に用いられたことは、まことに注目に値する。
- 17) 註 14) をみよ。 18) この2だけは楔形文字の数字で書かれている。
- 19) 2 gemé, 18 sil ずつの še-ba 36 sil (=¾ gur-sag-gál) が、やはり楔形数字で書かれて、他と区別されている。
- 20) Cf. P. Deimel, *Die GAR-Texte der Urukagina-Zeit...*, Or. 32, pp. 1~83.

- 21) 「明晰」であるのは、このタブレットが孤立した記録ではなく、数十の家畜飼育・管理記録の中にこれを位置づけることができるからである。その整理は現在準備中であるが、このテキストの背景について1, 2言及しておく。支配者以外にこのテキストに現われた2人の人物のうち、Nigin-mud は、Barnamtarra が所有・管理し、改革後バウ女神の名の下にシャグシャグが管理した世帯の *lú-kur₅-dab₅-ba* で、*sipa-udu-síg-ka* 「毛の羊の牧者」として各種の多数の文書に登場する。Ur-šeš(?)-dù-a は GAR-Texte (cf. Or. 32 [註 20] 参照) と *udu-síg* の飼育・剪毛に関する文書に主として現われる。ただし DP 641, IV では、Nigin-mud とならんで男役 (*kin-dù-a*) 記録に現われている。Ur-šeš(?)-dù-a は Lugalanda 時代にしか現われない。そしてほとんど凡ての場合、Nigin-mud に付随して現われている。Cf. Fö 73, 77, 92; RTC 51, 66. なお Barnamtarra—Šag₅-šag₅ の主管する凡ての *še-ba-lú-kr₆-da₅-ba* 文書に姿を現わし、GAR-Texte にも常に現われる Nigin-mud が自が分の羊を *Gír-su^{ki}* の *é-gal* に伴い、むしろ下位にある Ur-šeš(?)-dù-a が *Lagaš^{ki}* にあらわれていることも一考を要する。端的に云えば、*é-mí-é^d-Ba-ú* の世帯は *Lagaš^{ki}* よりも *Gír-su^{ki}* により密接に関連することが暗示されているからである。なお Uruk., Cônes B (et C), III₁₆ (III₁₉) および VIII₂₈~IX₁ (VIII₈₋₁₀), Uruk., Plaque ovale, I₁₀₋₂₁ 参照。
- 22) Allotte de la Fuÿe. Documents présargoniques, Paris, 1908-1920 の略号。
- 23) 中原, 本誌前号論文, 第2節 (B), pp. 86-88 参照。
- 24) М. В. Никольский, Документы хозяйственной отчетности древнейшей эпохи Халден пез собрания Н. П. Лихачева. 1908. の略号。
- 25) 「祭礼の奉納物, 贈物」。中原, 前掲論文, 註14参照。
- 26) STH 1, 15 の *igi-nu-du₂-giš-me* の部分 (*nu-sar* たちが代表受取をしている) については、拙稿「シュメール都市国家ラガシュにおける神殿の社会組織について一割当地保有者をめぐって一」(『史林』1958年第6号) pp. 158~159 参照。STH 1, 15 を始めとするこの種の *še-ba* 表には、*igi-nu-du₂-giš* に対する *še-ba* の代表受取人の title は書かれていないが、DP 107 などと人名が重なり合うことによって、*nu-sar* と断定したのであった。
- 27) Cf. L. W. King, A History of Sumer and Akkad, London, 1910, pp. 18~20.
- なお、Lagash 王朝の創設者 *Ur^d-Nanše* はその名前がナンシェ女神との深いつながりを示していることから推測されるように *é^d-Nanše* の建設に屢々触れている (Cf. E. Sollberger, Corpus des inscriptions «royales» présargoniques de Lagaš, Genève, 1956, Urn. 20, 23, 24, 25, 27, 28, 29, 30, 31, 33, 34, 35, 36, 37) が、より屢々 *é^d-Nin-gir-su*, *èš-Gír-su* の建設に触れている (Sollberger, Corpus, Urn. 2, 3, 8, 9~17, 20, 21, 23, 25, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 33, 34, 35, 36, 37)。しかるに *é^d-Ba-ú* の建設については一度も言及がなく、益と壙に一度ずつ *é^d-Ba-ú* の名が見えるだけである (*ibid.*, Urn. 47, 48)。 *é^d-Ba-ú* の建設を

é-d-Nin-gír-su の造営に続けて記すのは Urukagina だけである (*ibid.*, Urk. 1=Cône A, I₁₀₋₁₁; Cônes B [et C] I₁₀₋₁₁ [II₁₋₂]). なお Urk. II 年における Barnamtarra の葬儀の供奉者に対するパンとビールを支給を記録した宗教的テキスト TSA 9 は, gemé-d-Nin-gír-su 113人に対して, gemé-d-Ba-[ú] 36人を挙げている。この数字はウルカギナ時代における宗教機関としてのバウ神殿の規模の大きさを示すものかもしれない。

- 28) Gír-su^{ki}, Siraran^{ki}, Lagas^{ki} が Ki-nu-nir^{ki}, É-babbar, uru+kár^{ki} などよりも遙かに大きかったこと, および d-Nin-mar^{ki} 所属の gemé 14人に対して d-Nanše 所属の gemé 90人がいたことを示す記録がある。Cf. DP 159. この記録には é-d-Ba-ú が出て来ない。
- 29) Enentarzi 時代から, ensí 妃所管の, 神々への捧げ物記録には, ニンギルス神に続いてバウ女神の名が出てくる (TSA 51, II)。また Lugalanda 時代には d-Ba-ú の名のついた月名も現われる (cf. TSA 10)。
- 30) sag-apin は字義通りには「鋤の頭」で, Pflüger (Deimel), chef de culture (Genouillac), conducteur de charrue (Rosengarten) などと訳される。実際に此の肩書の人々が集中的に現われるテキストは, še-numun (種大麦), še-gisal-sig-ga-gud-du-kú-dè (たがやし鋤の牛が食うための大麦) の支出記録群 (cf. DP520~546) と牛・ろばの飼育に関する記録 (例えば: DP 100, 101) である。すなわち sag-apin は, é-mí ないし d-Ba-ú の管理・所有する gán-níg-en-na の播種・鋤耕の責任者である; cf. DP 529。
- 31) An. Or. II, p. 39. なお Allotte de la Fuÿe は hommes de la maison du roi (*Revue d'Assyriologie et d'Archéologie Orientale* [略号 RA], 7, Paris, P. 142) 「王の家の者」, R. Jestin は sujets du roi 「王の臣民」と訳している (Jestin, *Le verbe sumérien. Determinations verbales et infixes*, Paris, 1943, p. 400)。Cf. Rosengarten, *op. cit.* p. 187. なお中原与茂九郎「シュメール都市国家の平民 (šub-lugal) に就いて」(大類伸監修, 西洋史研究会編『西洋史研究』第1輯所収)(昭和18年)参照。
- 32) この STH 1, 6 は, 同年の ezen d-Ba-ú 「バウ女神の祭」に際しての lú-kur₃-dab₃-ba に対する zíz-ba 「エンマ麦分け」と, 人名・人数とも殆んど一致する。そして ezen-d-Ba-ú に際しての zíz-ba は, 今までのところ lú-kur₃-dab₃-ba に対するものしか見出されていない。
- 33) Deimel は uku-uš について, «Diese werden die Offiziere der šub-lugal sein» (Listen über das Betriebspersonal des é-d-Ba-ú (Konscriptionslisten) in *Or.* 26, p. 55) といい, また «eine höhere Klasse von Militärkolonen» (*Or.* 9/13, p. 308) と書いている。この解釈については, DP 138 (次章冒頭に引用) や še-ba lú-kur₃-dab₃-ba-Listen, さらに DP 135 の記載から, 筆者も疑問をもっている。この問題については Rosengarten も否定的で, 少なくとも uku-uš が全体として土官ではなく, 文書に表われる限り彼らは é-gal 「王宮」と密接なつながりがあったことを強調している (Rosengarten, *ibid.*, pp. 187, 196)。Cf. Nik 137.

- 34) *šub-lugal* の *še-ba* 表における隊は, *Urk.* の治世 II 年には 6 隊 81 人および独立して人名の出る 2 人 (*Ur-sag*, *Ur-^dNin-sar*) の計 83 人に膨張する。
- 35) 筆者は神殿共同体, 神殿都市の観点から, *lú-kur₆-dab₃-ba-me* をしかく考えた (前掲『史林』所収拙稿, 1958 年, 参照)。神殿組織への都市住民を含む王国内住民の組織率が問題となり, かつ社会の氏族組織的契機が取上げられるに至った今日でも, *Gír-su^{ki}* において, *^dNin-gír-su* を名目上の長とする 1 万人に近い人々を組織・運営する世帯の存在が, *Lugalanda* 時代に考えられるとすれば, 上からの管理組織としての *Lagash* 王国末期の神一組織と伝統的氏族組織との結合の問題が改めて提起されねばならない。そのとき, 都市中心の大神殿の神一組織の *gán-kur₆* 保有者層のみを本来的の市民と呼ぶべきかどうかは問題である。*^dNin-gír-su* と *^dBa-ú* のそれらを合しても 3000 人にならない (恐らく全ラガシュ王国で 1 万人以下) と考えられるのに, *Urukagina* は 36,000 人の中から選ばれてラガシュ王権を与えられたからである (*Urk. Cône B, VIII₅* なお註 40) 参照)。

また逆に, 神の名で組織される人々を全体として非自由市民的に, *clients of the more prosperous temple officials and administrators* (*S. N. Kramer, The Sumerians, Chicago, 1963, pp. 76~77.*) と見る考え方もある。しかし, 次章で明らかにするように, *more prosperous officials and administrators* と考えられる豚飼いの *Lugal-pa-è* や 2 人の *ugula-ki-síg-ka*, さらに *engar-ki-gub* などが一兵士として *ugula* の下で徴集されたことは, 平時の *clients* 関係とは別の原理もまた働いていたことを意味する。*client* 関係の存在だけで, 市民の存在を完全に否定することはできない筈である。

さらに, *Дьяконов* も *gán-kur₆* が神殿の勝手で取上げられ得た (*Kramer, ibid., p. 76*) と言っているようだが, 逆に *še-ba-lú-kur₆-dab₃-ba* リストに出てくる限り, *gán-kur₆* の保有が認められるのが通例と考えられ, しかもこのリストには相当程度の固定度がある (『史林』拙稿参照, 特に第二表をみよ) 以上, 幾つかの交換・削減の例だけからそのように結論することは早計であると筆者は考える。なお註 55) を参照されたい。

- 36) この 1 は楔形数字。本タブレットでは死んだ者は普通の数字で, 後継者は楔形数字 ∇ で書かれている。 37) *ibila apli₆ fils, héritier* (相続者) (*Labat*).
- 38) この *Enim-ma-ni-zi šub-lugal* と同名の *sag-apin* (註 30) 参照) とは恐らく同一人物である。この問題については第 3 章で, *ugula* に関連して触れる筈である。
- 39) *uku-uš* については註 33) をみよ。
- 40) この *KU* は *díb* もしくは *dab₃* と読むべきかもしれない。*lú-kur₆-dab₃-ba* の *dab₃* と同じ字である。Cf. *U₄-^dNig-gír-su ur-sag ^dEn-líl-lá-ke₄ Uru-ka-gi-na-ra nam-lugal Lagaš^{ki} e-na-sum-ma-a šà-lú-36,000-ta šu-ni e-ma-ta-díb-ba-a* (*Urk. Cône B, VII₂₉~VIII₆*): 「エンリル神の英雄ニンギルス神がウルカギナに *Lagash* の王権を与え, 36,000 人の中から彼

- (=ウルカギナ)の手を擱んだ時に」。Unterschrift の *lú i-tug, lú nu-tug* 参照。ku ならば *wohnen, sitzen.* 41) Deimel, Or. 26 (前出), pp. 54~55.
- 42) Deimel, Das šumerische Lexikon (略号 ŠL), p. 102, 4; TSA, p. 67; Rosengarten, *op. cit.* p. 56, n. (2).
- 43) E. I. Gordon, Sumerian Proverbs: Glimpses of everyday life in ancient Mesopotamia, The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia, 1959. p. 92.
- 44) Šeš-lú-dùg, ^dBād の他, Gala-tur, Lugal-maš-su, Amar-ezen の計5人が, Hackman, Sumerian and Akkadian Administrative Texts, New Haven, 1958. 347, I~II (Enent. II) では *uku-uš-me* と一括されている。なお本章末尾において *ugula-simug* 「鍛冶屋の長, たばね」への言及がなされる。
- 45) Cf. Fö 60 (Lugalanda VI, ezen-še-kú-^dNanše-ka)。engar の人数・順序とも, DP 87 と同一。maš-da-ri-a 文書の1つである。Lugal-pa-è は最後に出てくる。
- 46) engar-ki-gub についてはまだ定訳と称すべき訳語はない。それは *gub* の解釈が定まらないからである。Rosengarten は「耕地にいる engar」《engar qui se tient sur la terre》であって, *peut-être par opposition au personnel «volant», comme les laboureurs et leurs équipes* だとしている。しかし DP 646, cols. III~IV (後出, p. 44) には engar-ki-gub-ke₄-ne e-KU とあって「ki-gub の engar」という文法的構造を持っていたことが明らかであるので, Rosengarten の訳 (*ibid.* p. 56, n. (2)) は正確とはいえない。なお Th. Jacobsen は, *gub* の形容詞的用法に “regular”, “ordinary”, “standard” の訳語を与えている (Cuneiform Texts in the National Museum Copenhagen, chiefly of economical contents. Leiden, 1939. p. 64)。また古く Genouillac は *les cultivateurs à endiguement* 「堤防の耕作者, 農夫」と訳している (TSA, p. 67)。
- 47) 中原・吉川「ブレ・サルゴン時代の社会経済史料 (1)~(4)」(『古代学』7/2, 8/1, 3, 4. 昭和33~34年) 参照。DP 646 については, その (3) をみよ。
- 48) これらの一連の engar の他, 実際の土地管理に当たっている engar には, 時に engar-uru 「町の engar」という title のつく, Enim-^dEn-lil-la-an-tuš という engar がある。同じ人物は Nik 105, 106, 107, 109, 111, 112, 113, 114 において肩書なしに, また Nik 36 では *lú-^dBa-ú, engar-mah-e mu-gíd* として現われる。また DP 593 (?-V) には *lú-^dBa-ú engar-uru mu-gíd* という一節がある。語尾子音が r であるために engar-uru か engar-ré か判断に苦しむところもある。še-ba lú-kur₆-dab₃-ba の5, 6人よりも, 実際に活動していた engar はやや多かったと思われる。これらの点についてはなお再考を要する。
- 49) Cf. Deimel, Die Bewirtschaftung des Tempellandes zur Zeit Urukaginas (Or. 5, 1930), p. 20.

- 50) Allotte de la Fuje, En-e-tar-zi, patesi de Lagaš, in *Hilprecht Anniversary volume*, Leipzig. 1909, p. 130. 一般の lú-kur₃-dab₃-ba の場合についても、かれらの歳費、扶持を意味しうる訳である。
- 51) しかし、Lugalanda—Enentarzi 時代にも、Ur-sag gal-ukù は醸造用の麦などの支給を受けている； cf. RTC 56 (Enent. (?)—V), Nik 71 (〃(?)—V), 94 (〃(?)—V), Fö 76 (Lugala. (?)—I). 52) このことは Nik 3 (Urk. V) によって逆推される。
- 53) gán-sir-la-maš については、中原「シュメール土地制度における託當地について—折半小作と開拓地—」(『西洋史学』No. 50 所収) pp.10~11 参照。なお、本タブレット Col. IV に gán-še-sir-la gán-úru-lal と総括されていることは、この種の耕地の性格を考える時に留意すべき表現であろう。
- 54) このように gán-úru-lal (託當地・小作地) の受託者の中に、此の種のタブレット以外姿を見せない人々がかなり多数現われる問題は、é-mí—lú^d-Ba-ú の世帯の、都市王国全体との関連を考える上で、重要な問題を提起する。
- 55) 「市民軍的構成」というのは、lú^d-Ba-ú の組織内部に関してである。しかし lú^d-Ba-ú を、一般的に都市居住民が所属すべき多くの組織の一つと見ればラガシュ王国の軍隊が不完全ながら市民軍的構成(神の前における市民の平等ということの或る程度の実現の意味で)を持っていたことになる。ここでも註 35) に指摘した組織率の問題が介在する。Urukagina のいうラガシュ人 36,000 人(註 40)に原文引用)は、文脈からみてラガシュ王国内の自由成年男子であろう。とすれば lú-kur₃-dab₃-ba へのその組織率は 3/4 程度となる(註 35) 参照)。都市の外に住む農村住民が、この 36,000 の中に含まれるべきかどうかとも早急には断じ得ないが、都市内居住者で lú-kur₃-dab₃-ba でなかった者、神殿などの支配管理機構に直接所属しなかった者の存在は無視できない。それは gán-úru-lal の受託者の中にも看取できると思われるし、また uru「都市、町」の字を付せられた職名(ugula-uru, nimgir-uru, engar-uru 等)や耕地(ex., gán-nam-uru kú-a: DP 546)の存在から立証しうる。
- 何れにせよ、公的組織の組織率が王国の全人口の 3 割を越える程度にまで達していたことは、それを上廻る人々が都市内に居住していたことを意味する。この点では当時のシュメールの穀物の収穫の高さが問題となるであろう。
- 56) Or. 26, pp. 36~39, p. 56. なお Nik 3 では giš-kin-ti-me のグループの末尾に、še-ba-lú-kur₃-dab₃-ba の場合と同じく、「王宮の sangu なるウウ」Ú-ú sangu-é-gal が姿を現わす。このことは軍事組織と労働組織との重複を示す 1 例として興味深い。
- 57) Soliberger, Corpus, p. 46, Textes d'Enentarzi 1, Lettre.
- 58) 『西洋史学』No. 48 所収前掲拙稿参照。
- 59) Hackman, op. cit., 347.